# 国際学部10年の歩みと今後の展望

宮　本　倫　好

# My Past Memories of Faculty of International Studies of Bunkyo University and Its Perspective for the Future

Noriyoshi MIYAMOTO

**Abstract**

Over ten years have passed since the foundation of the Faculty of International Studies at Bunkyo University. The fact that I am one of the "Charter Members" has prompted me to write about my memories of the past as well as prospects for the future. The editor believes that I am well qualified for the job, as I have been deeply involved in the management of the faculty, as dean for four years and vice president for more than three years.

I want to divide the past ten years into three phases: the first when everybody was wholeheartedly eager to develop a new tradition, the second when the effort was suddenly interrupted by what is called "the Education Ministry problems," and finally the third when we succeeded in almost overcoming the revenue gap between the income and the expenses by revising the faculty following the new trend of the times.

Although we are rather behind others because of the above-mentioned problems, we do not need to be very pessimistic about the future. On the contrary, the IT age gives us a god-sent chance to take others over, as long as we have a good strategy suitable to the requirements of the new age under the new leadership of Prof. Wakabayashi, expert of IT.

「老人は同じことをくり返し、若者は言うべきことを持たない。退屈はお互いさまである」と言ったのは、フランスの歴史家兼ジャーナリストのジャック・バンヴィルである。退職を半年足らず後に控えた今、国際学部十年余の回顧を求められた老境の私は、精々くどく退屈な描写にならないようにしたいと思う。着任後比較的日の浅い先生方よりは、曲がりなりにも学部創設以前からの関与者という連続体験から、多少の言うべき内容は持っているのだから。ただし、以下の記述は正確な時系列的記録というよりも、折にふれての関係者の回想を私流に勝手に再構成したものに加え、私自身の心象風景をランダムに述べたものであるとしてご海容賜れば、と願っている。

「その時、文部省の係官はわざわざ廊下に出てきて、帰りかけていた文教大学学園の一行に、『方法はないことはないですよ』と親切に語りかけた。その一言で、一行の顔にぱっと喜色が浮かんだ」―― 国際学部の運命が決まったその瞬間を物語り風に再現すれば、こんなふうになろうか。

湘南キャンパスに国際学部を作る構想は、今から十五年前のキャンパス開設直後からあった。茅ケ崎市も、将来構想の中で「国際関係の学部を是非」と要望していた。そこで学園は一九八六年にすでに調査に乗り出した。翌八七年春には、茂木勇学長から関係者に正式に開設に向けた準備の指示が出ている。

この日の相談は国際学部をどう作るかについて、こちらの大まかな素案を持って文部省側を最初に打診したものだった。しかし、まだ国際学部が珍しかった時代で、文部省の条件も厳しかった。「やはり原案は諦めるか」と絶望して文部省を後にしかけた時に、係官は「教養学部基準なら」という案を示したのである。広い一般教養を重視するべき国際学部のあるべき姿としては、東大の教養学部のように多彩なカリキュラムと多数の教授陣を擁すべきであるという思いこみが、当初から文部省側にあったのであろう。

開学が優先課題だった学園側はこの示唆に乗った。本来教養基準というのは、私学の経営としては無理な話である。隣の情報学部と比べても、学生数当たりの教員数が倍近いとあっては、経営が立ち行くはずはない。それでもやろうとしたのは、短大、情報学部の経営がきわめて順調で、理事者側に「何とかなる」という楽観論が支配的だったためではなかったか。当初の観光を単独学科とする二学科案から一学科案に収斂する過程において、他学部からの教員の名義借りなど、後日大きな禍根となる方策が無防備に取られた。しかし、ともかくも、関係者の非常な努力によって、予備認可、本認可と順調に進み、九〇年四月への開学準備が整っていった。

情報学部に籍を置いていた私は、前年同学部に採用されていた青木利夫教授、情報学部生え抜きの米沢弘、笹川正博両教授（共に故人）といっしょに、開学準備のため八九年四月、国際学部要員となった。それに伊津野重満教授（学部長予定者）らが加わって準備委員会が結成された。課題山積で、毎日毎日が息つく間もなく過ぎていった。しかし、一つの目標に向かって無から小さな歴史を作りあげる喜びが、全員の心を一つにした。

最大の課題は入試だった。認可から殆ど宣伝の期間がなかったのに、全国から志願者が殺到した。キャンパスにあふれかえる志願者を見て、関係者誰もがこの学部の明るい前途を確信した。「この調子だと来年はプレハブ試験場を臨時に建てないと、収容し切れないことになりそうですね。予算は約千五百万円か」と当時の事務局長が会議で真面目に言ったことが、妙にこそばゆく懐かしい。アジア各地からの留学生の応募も多かった。

主要大学が終わった後の入試だっただけに、満身創痍の受験生ばかりだった。しかし、最後のチャンスに真剣に賭けた者が多く、石の中にキラリと光る玉が結構混じっていた。今でも当時を思い出す教員同士の会話が「とにかくオモロイ連中が結構いたな」という結びで終わることが多い。卒業後の大学院進学、海外留学組もこのクラスが一番目立ったのではないか。

国際学部の第一回臨時教授会は九〇年四月十三日。初年度赴任は総員二十六人。このうち現在在籍者は荒井、伊津野、伊藤、貝瀬、デュバル、小泉、小林（勝）、ロイ、戸田、山崎、鎧、若林の各氏と私の十三人。私はこのグループを今でも密かに「国際学部のチャーター・メンバー」と呼んでいる。何しろ経歴も思想も専門も千差万別。人柄に至ってはまったく日々の接触の中で、手探りで一人一人確認して行くしかない。大別して、出身分野は学界、実業界、ジャーナリズム

などと多彩であったが、学部内の人間関係は概して良好であったと思う。「多少の遠慮と節度を維持しながらも、言論の自由があり、言いたいことを存分に言い合ったなあ」と青木利夫・現名誉教授は述懐する。初代学部長は伊津野教授、学科長は青木（利）教授、国際関係学系、文化学系、経済学系の初代主任はそれぞれ、私、米沢教授、田辺教授であった。

どんな学部に仕上げて行くかは「歩きながら考える」という要素も大きかったが、出発前に関係者で何となくできていたコンセンサスは、学生に「豊かな国際的センスと実践的語学力をつける」ということであった。実践的といえば、観光関係の実務重視という当初の方針も、専門教員の充実という面から生かされていて、学生の根強い人気が続く予兆があった。

実践英語という面では、少人数制が私と当時の教務部長（情報学部・吉井博明教授）の話し合いで実現し、一挙に一クラス二十人制となった。これは国際学部の宣伝に大いに利用されたが、果たして犠牲に見合った成果が上がったかどうかについては、私には自信がない。しかも、必要とした膨大な非常勤教員の文部省登録が不徹底であったため、後に起こった「文部省問題」の一つになった。

新入生を合宿に連れて行くというアイデアも実行された。この合宿は教職員間の親睦、学生の連帯意識の涵養にも大いに役立ったと私などは肯定派だったが、学生の多少の不祥事などを口実にして後に廃止された。後年何回か復活の試みはあったが、一度覆った水は盆にはもう戻らない。「何でもいいと思われることはやってみよう」という発足当初のエネルギーと熱気は段々冷却し、無難で教員の犠牲が少ない選択が幅をきかせるようになったのは、色んな革命後の歴史にも通じる人間の性（さが）ではないか、という気がする。

国際学部である以上、海外の諸大学との提携を果たさなければならない。語学研修を実行するためにも、提携校は必要だ。学園全体として正式なものはないに等しかったから、最初の提携校の選択は大切だった。私は伊津野学部長の賛同を得て、ミシガン州立大学（M.S.U.）にターゲットをしぼった。実はここは、私の旧制中学の同級生であり後年の赴任が決定していた青木孝誠教授が研究員として関係の深い大学だった。

英語研修の方はこちらがお客さんだから話は速かったが、姉妹校提携は先方が一流州立大学、こちらは発足間もない国際的に無名の私立大学の学部とあって、簡単には進まなかった。二年目に第一回英語研修生を高師助教授（当時）と引率した際、先方のアジア研究所の責任者と会い、M.S.U.のアジア研究の学生を夏期研修で湘南キャンパスに受け入れることを提案した。ちょうど先方には、単位を与えるアジア実地研修の計画が持ち上がっていた時とあって、この話に先方は乗ってきた。しかし、三重大学、滋賀大学、創価大学という既提携校を差し置いて、わが国際学部が何を提供できるか。私はまったく独断で、無料のホームステイ、英語による日本・アジア関連の無料授業を提案した。「無料」というのがきいたのか、研究所長の感触は極めて良かった。

このプログラムは翌年に実現し、以後円高の進展でM.S.U.側がアジア・プランそのものを中止するまで二年間続いた。ホームステイの方は外事課の協力で茅ケ崎市内の国際交流協会会員が引き受けてくれ、英語による授業は鈴木、土井、山口、小泉、ロイなどの諸先生が快諾してくれた。学生やホスト・ファミリーも全面協力で、空手の実演、はっぴを着た餅つきの実施など盛り沢山の行事が組まれた。

まあ、新設校の悲しさで、けなげなサービス過剰の気味はあったが、提携までの投資と考えて許して頂くことにした。おかげで翌年、M.S.U.の学長が来日した時、先方はサインを済ませた協定書を持参し、ホテルでパーティを開いて永岡順学長を招待してくれた。しかし、当時私と最

悪の関係にあった某省出身の某事務局長の意地悪もあって、この協定の文教側の署名は一年間以上棚ざらしにされた。よくも先方が破棄をしなかったものである。

その後の海外各大学との提携は先生方のご努力で比較的順調に推移して、現在に至っている。オーストラリアのモナシュ、アメリカのオレゴン、それにサンフランシスコなどの各大学だ。私はいずれも訪問したり交渉したりする機会に恵まれたが、M.S.U.の時のように、もうこちらが過剰サービスをする必要もなく、ビジネスライクに話を進められるのが有難い。アジアやヨーロッパにも相手が欲しいが、これも追々実現しそうな方向が出ていて喜ばしい。

正式な提携ではないが、国際的な試みが他にも色々あった。例えば、青木孝誠教授が開拓したディズニーワールドへの派遣実習である。フロリダのディズニーワールド内の日本レストランで半年間研修しながら、サービス料を貰い、それで全米各地を旅行して帰るというプログラムだが、「学部が後援するにはふさわしくない」という教授会の意向で、ライセンスセンター（私が初代所長、続いて荒井教授、小林ひろみ教授）の事業にした。確かにアカデミックではないが、このレベルの海外研修に関心を持つ学生が多いのも実情であり、受け入れも非常に良心的であった。だから、毎年受験競争は厳しく、文教に特別枠を確保するのが精一杯だったが、これも今年から撤廃され、特別扱いの存続自体が危ぶまれている。

茅ケ崎市の国際交流協会の斡旋で、アジアからの短期研修生が文教大学を訪問し、学生と交流を深める計画もしばらく続いたが、いつの間にか取りやめになった。有名なエール大学の合唱団に体育館で公演をしてもらったこともあった。「何でもいいから、キャンパスにいつも外国人がウロウロしているのが国際学部の存在意義」という、確か小泉先生の言葉に私も全面的に賛成だ。これが身近な国際化現象の象徴だと思うのだが、留学生の減少とともに、キャンパスから国際色が急速に薄れていったのが寂しい。こうした遠因の一つにM.S.U.との提携にも現れたように、国際交流自体に厳しい中央コントロールを加えようとした前記某氏の存在が大きな影を落としたと思う。私自身、国際交流部長を途中で投げ出したが、この人と学長の前で大げんかをした結果であった。

けんかといえば、理事会幹部が湾岸戦争直後、勝手に海外研修を不安を理由にドタキャンしたのに激怒して、あの温厚な青木利夫教授が国際交流部長の辞表をたたきつけたという事件もあった。こんな古い話を蒸し返すのも、学園にとって国際交流というのは当初は、「金食い虫のやっかいな存在」という程度の認識しかなかったという私の積年の恨み節を披露して、この機会にうっぷん払いをしたいというケチな了見からである。

国際学部の開設と情報学部開設十周年を記念して、横浜で講演会、シンポジウムを開催したのも草創期のエネルギーを示すものとして懐かしい。長洲一二・神奈川県知事、ジェラルド・カーチス・コロンビア大学教授、高原須美子・元経企庁長官、関本忠弘・ＮＥＣ会長など当代一流のメンバーを呼んだ。青木（利）教授、情報学部の加古教授（故人）の尽力が大きかった。

光の面があれば、影の部分がある。国際学部の歴史を語る時、やはり避けて通れないのが「文部省問題」であろう。国際学部教員の多くが一丸となって新学部の創造に文字通り心血を注いでいた時に、足下に巨大な落とし穴が掘られていた。一教員の内部告発によって突然、「文部省問題」が降って湧いたのである。大多数の真面目な教職員にとっては、まさに青天の霹靂であった。

先に述べたように、当初の設置計画が文部省の示唆で教養基準に変更になった時、特に人員面で適切な変更計画が行われていなかったことが、学園側の根源的な誤りであった。他学部の教員の名義を借りてつじつまを合わせたが、現実に所属する部の学部長にまで選ばれた教員もあった。

私自身、後日その投書を読む機会があったが、こうした内容が実名で事細かに内部告発されると、文部省としては放って置けない。実情調査、改善勧告が相次ぎ、学園も学部も振り回された。青木学部長の任期二年は、全エネルギーを使ってこの収拾に忙殺された。私は学科長として氏の憔悴ぶりを傍らで連日目の当たりにし、ハトのような小さい胸を痛めた。

この問題の対文部省処理のために、某氏が文部省の肝入りで文教大学入りをした。おかげでとにかく一件は落着した。ただ、完成年度に向け、一年間の一種の「執行猶予」がつけられた。すなわち、発足後五年間たって国際学部はやっと文部省の監視下から解放されたのである。この某氏の人事は、学園全体にはともかく、この人に徹底不信を持たれた国際学部にとっては色々問題も多かったと思う。この人は自己にも厳しかったが、教授会構成員の利己主義やご都合主義には容赦がなかった。私の学部長四年の在任中、乏しいエネルギーの七割方をこの人への対応に浪費され、任期が終わった時には、私は抜け殻のようになっていた。孤独な学部長としての私を終始支えてくれたのは、前半が学科長の鈴木教授、後半が同じく小泉教授であった。夜中の電話などで、教授会ではおくびにも出せない愚痴を、お二人は何回我慢強く聞いてくれたことか。

この「文部省問題」の評価は人によって多少分かれるだろう。私自身、理事者や告発者を改めて責めようとは思わないが、国際学部の草創時代の折角の燃えるようなエネルギーが圧殺され、すっかり守勢に回らされてしまった結果、学部の発展が数年間大きく阻害されたことに心を痛めた一人である。この間に、他大学の類似の学部に決定的に水をあけられたのは全学生、多数の教職員にとって、実に痛恨事であったと思う。

こうして伊津野学部長時代の四年間をエネルギーに満ちた草創期、青木学部長の二年間を足固めと文部省問題の対応期とすれば、私が引き継いだ四年間には、採算面で許容範囲に収まる学部への脱皮と、魅力ある学部への再編成という課題があった。

学部改組は言うは易く、行うは難い。いわんや大赤字学部から脱するには、端的に言って教員を大幅に減らし、しかも受験生への魅力を増すという二律背反的離れ業を実行するしかない。青木学部長時代に既に基本的な取り組みが始まっていたが、何回か合宿を繰り返すうち、学部全体が改組に向けて徐々にエネルギーと英知を結集させていった。

教員数を減らすには自然減を待つのが一番無理がない。欠員教員の後任の採用は本当の基幹科目だけに限定し、しかも教育の質を落とさないよう、学部全員の理解と長期的な協力を得た。幸いなことに、文部省自身が教養基準という過酷な教員枠を撤廃する見通しとなったため、制度面の制約は除かれた。

こうして、二〇〇〇年度終わりからの大量退職を機に、少数精鋭の新採用を図った。一方、学部の魅力を増す方策として、「国際学部国際学科だとまったく教育内容も進路も見えない」という発足時からの批判を是正するために、より内容を明確にした二学科四コース制にすることとした。カリキュラムと学部内のコンセンサス作りは主として小泉教授を長とする改組委員会に任せ、私は理事会側との折衝に全力をあげたが、小泉委員長以下、荒井、斉藤、杉山、小林（勝）、小林（ひ）など関係諸教員の協力には、感謝の言葉もなかった。

理事会側には鬼と自称する例の局長がいて、無理難題をしばしば押しつけた。私も人生終末近くになって随分我慢強くなったものだと思ったが、「今の国際学部を改組で救うには、西武の松坂投手クラスの人材が何人も必要で、国際学部にはそんな人間を採用する力はない」と万座の中で公言されたこともあった。この新採用人事も学部あげての取り組みで何とか切り抜け、やっと文部省への申請に漕ぎ着けられる見通しがついた時に、最後のどんでん返しが起こりかかった。

「事務の準備不足もあり、一年間申請を延期する方が安全だ」と鬼が言い始めたのである。

情報学部改組が直前になって崩壊し、短大の改組が何回も先送りになっていることを目の当たりにしてきた私は、今チャンスを逸すると、国際学部も折角盛り上がったエネルギーが雲散霧消し、その後に恐ろしい虚脱状態が訪れるであろうと直感した。この時、「臨時常務会を緊急召集し、中央突破を図れ」と知恵をつけてくれたのが情報学部の中村教授（当時常務理事）であった。私は理事長、学長にあらかじめ根回しし、小泉委員長と席上一気に流れを押し戻すことができた。しかし、当初の希望に反し、夏前申請が三か月遅れになって、初年度は宣伝に万全の態勢を取ることができなかった。

こうして新学部はともかくも発足した。「最初のつまずきを修正するのにここまでかかりましたね」と慰めてくれた人があったが、私学を取り巻く客観情勢はこの十年間に激変してしまった。私たち老兵は歴史的役割を終えて今消え去ろうとしているが、新学部長、学科長のもと、今後戦列に参加する精鋭も加え、学部の思い切った発展を図って欲しいと切望するのみである。

与えられた本論の課題には「将来の展望」もある。勝手な私見を述べさせて頂ければ、ＩＴ時代は恐らく国際学部の教育にも抜本的な改革を迫るだろう。もっとも、ピーター・ドラッカーの近著によると、ＩＴ革命の本当の姿が見えてくるのはまだまだ先だという。だから、海外大学との提携強化も含め、今からＩＴ時代の戦略を思い切って打ち出すことが、これまでの遅れを一挙に取り返し、今後の国際学部に新しい展望を開くと私は確信している。大学院の設置も、既存の常識的なアイデアの延長線上では恐らく成功しないだろう。その意味で、私のようなアナログ人間が去って、コンピュータの専門家若林教授が学部長職についたのは、時代の趨勢を学部が見事に読み切った選択だったろう。まさに「奇貨おくべし」である。

さて、歴史とはしょせん客観を装った書き手の主観である。たかが一学部の、それもたった十年の歩みでも、書き手の未熟さと思い入れによって、かくも奇妙にデフォルメされた像になるのかと、関係者はこの小論に唖然とされるかも分からない。「人面は知らず、何れの処へか去る、桃花旧に依って春風に笑む」と隣国の詩人は、人と歳月の移ろいにも変わらぬ自然に対し、人生のはかなさを歌った。まだ少し早いが、この桃花を桜花に置き変えれば、春の盛りの湘南キャンパスの姿となり、その爛漫の桜花に彩られる直前に、キャンパスを去る私の感傷に、この詩こそふさわしい。

折から、歴史的区切りとして「キャンパス開設十五周年・国際学部開設十周年」の記念行事が十月末に開かれた。卒業生向け初めての「ホーム・カミング・デー」を実施し、高校生の入学志願者を狙った「一等・ディズニーワールド旅行」の懸賞論文も募集して、全国の高校を中心に約六百通の応募という予想外に大きな反響を得た。これは文教大学湘南キャンパスの全国への訴求力も大したものだという自信を与えてくれた。学部の過去から未来へつなぐこの試みに、土井、鈴木、斉藤、椎野、三木らの諸先生方が見せてくれた協力精神は、学部の将来に何よりの明るい展望を与えてくれたものと思う。発案者の一人として、これも何物にも代え難い思い出になることだろう。